

(平成十三年五月十六日 研究例会報告)

白話文学資料の命運

― 三國物語を中心として ―

井上 泰山

中国の文学は、用いられた文体によって、文言で綴られた「雅文学」と口頭語の使用をも忌避しない「俗文学」とに大別されるが、知識人の伝統的な観念の中では、後者を正統な文学として認めるといふ姿勢が希薄であつたばかりか、甚だしきに至つては、価値なきもの、もしくは社会風俗を乱す危険なものであるとして意図的に攻撃し排除しようとする傾向さえも現れた。その結果、写本を含む多くの「俗文学」作品は、知識人の批判の目にさらされにくい場所、すなわち、地下の墳墓や海外の図書館、あるいは宮中などに移動して生存することを余儀なくされた。今回の発表では、元代から明代にかけて文字化されたと思しき長編歴史小説『三國志演義』に的をしぼり、その様々な版本が、或るものは地下の墳墓に個人の埋葬品の一部として眠り、或るものは宣教師の仲介によつて西洋に渡つて残り、また或るものは宮中の内部に秘蔵されて命脈を保つた様子を、各々個別に紹介することによつて、所謂「文学革命」以前の中国において「俗文学」が甘受してきた位置を再確認することに努めた。こうした作業を通じて浮かび上がってきた今後の課題としては、中国文学の全体像の再構築を試みる場合、現存資料のみを唯一正統な根拠として作業を進めることの危険性を絶えず認識しておく必要があること、また、今後とも、地下や海外の図書館その他に残存している可能性のある、文字文献以外の資料にも十分な注意をはらう必要があること、等である。